

「勝ち組」雑誌にみるブラジル日系俳句

——日本力行会資料調査から——

児島 豊

一 日本力行会所蔵資料について

日本力行会は近代日本の海外移民の歴史において大きな役割を果たしてきた。同会は、まず一八九七年に牧師島貫兵太夫によって当初苦学生の援助・救済を目的として「東京労働会」として発足した。やがて「東京精勤会」へ改称するが、島貫の米国講演・視察の後、苦学生の渡米を奨励するとともに「渡米部」を設置、会名も「造士会」となり、さらに一九〇〇年、現在の「日本力行会」へと改称された。

このように日本力行会はキリスト教の精神を基盤とした苦学生支援にはじまり、やがて海外移住者への教育や援助、海外移住にあたっての送り出し機関としての事業を展開していった。そして「青年移住者を主に北米、中南米、旧満州、更にアジアなど世界各地に送り出し、昭和二〇年の太平洋戦争終結以前、既にその数一万余に達して」いたという⁽¹⁾。なかでも日本人移民の数が一九四九年当時でさえ「普通に三〇万と云ひ時に四〇万⁽²⁾」といわれていたブラジルにおいて、力行会員の数は特に多かった。そのため力行会ブラジル支部はブラ

ジル各地に「ブランチ」(支部)を持ち、自らは「ブラジル力行会」と改称し、「日本力行会と並ぶ「ブラジル力行会」となった」という⁽³⁾。

ところで、東京都板橋区にある力行会館は約一万三〇〇〇点に及ぶ海外移住・国際交流の資料・書籍を所蔵している。力行会館の資料目録は作成途中であるが、すでに相当数の俳句資料も見つかっている。とりわけブラジルの日系社会に流通していた俳句に関してはある程度まとまった量の資料が見つかった。

ブラジルに日本人が移民として初めて到着したのはおよそ一〇〇年前のことであるが、以後、紆余曲折を経ながらも決して少なくない数の人々がブラジルにおいて俳句を作っていた。「移民の父」と呼ばれた上塚周平(瓢骨)をはじめ、俳句を嗜んだ移民は多い。今回発見された資料はこうしたブラジルの日系社会における俳句の流通を明らかにする手がかりとして価値はもちろんだが、のみならず、俳句についての認識の枠組みが形成されるプロセスを明らかにするうえでも有効な資料であると考えられる。とりわけ今回の調査で発見

された『光輝』^{ひかり}『輝号』^{かがやこう}などのいわゆる「勝ち組」の雑誌は、俳句資料としてだけでなく戦後の日系社会を知るうえで貴重なものである。そこで本稿では、これまであまり言及されることのなかった「勝ち組」の俳句を対象に、ブラジル日系社会における俳句を読み・詠むリテラシー（俳句リテラシー）の形成について論じることとする（なお今回発見された『光輝』『輝号』の俳句作品データはリテラシー史研究のホームページで閲覧可能である）。

二 ブラジル日系俳句史概観

ブラジルにおける邦字新聞の嚆矢は、一九一九年に星名謙一郎がサンパウロで創刊した『南米週報』であるとされている（同紙は約一年半で廃刊）。戦前の有力紙を確認すると、太平洋戦争勃発直前の一九四一年八月に外国語新聞発行禁止令が公布され日本語による新聞の発行が不可能となる頃までの間に発行を見た主な新聞は以下のとおりである。

『日伯新聞』（一九一六～三九）、『伯刺西爾時報』（一九一七～五三（終戦後再刊））、『聖州新報』（一九二一～四一）、『南米新報』（一九二九～四一）、『日本新聞』（一九三二～四〇）、『フロエステ民報』（一九三五～四一）、『アリアンサ協同新聞』（一九三二～四一）、『パウリスタ新聞』（一九四〇～四一）。

各紙はさまざまな編集方針、経営方針によっていたが、多

くの新聞が文芸欄を設けていた。一九二〇年代半ばごろからの日本人移民のますますの増加にくわえ、コロノ（契約労働者）としての生活から脱却する人々が出始めたことにより、一九三〇年代に入るとサンパウロ市などには日本人移民のコミュニティが形成されるようになった。このコミュニティ内部における文学活動をリードしたのは、当初文学誌ではなく新聞や農・商業雑誌の文芸欄であった。そしてここで形づくられた人間関係が小説や詩歌の各ジャンルのグループの形成を助け、さらに文芸誌の発行へと進んでいくことになるのである。

ここで戦前の主な文芸誌に目を向けると、文学雑誌として一九三七年から約二年間刊行された『地平線』、短歌雑誌『椰子樹』（一九三九創刊）、俳句に関係するものとしては一九三〇年代に『おかほ』、『南十字星』などが創刊されている。『おかほ』は『椰子樹』の創刊にも関わったアララギ系の歌人岩波菊治らの編集による俳句と短歌の雑誌である。また『南十字星』はサンパウロ市で活動していた俳句団体「三水会」の機関誌で、『日伯新聞』の俳壇選者を務めていたホトギス系の俳人木村圭石が編集を行った。とりわけ圭石も編集にかかわった『おかほ』の創刊はブラジル日系社会に俳句を広めるうえで大きな役割を果たし、一九二七年に第一回の句会を開催した「アリアンサ俳句会」（後の「おかほ会」）に加え、一九三〇年代には「つばな会」、「半夜会」などいく

つかの俳句グループも誕生した。こうした俳句熱が新聞雑誌の俳壇を活気づけ、三三年には「農業のブラジル」誌が佐藤念腹を選者に迎え俳句の募集を行ったほか、三四年に「聖州新報」が、翌三五年に「伯刺西爾時報」が新聞俳壇を設け俳句募集を行っている。

しかし一九三七年のクーデターを経てヴァルガス大統領のもとと独裁政権が樹立されると、外国人移民に対する強硬な同化政策がとられ、さらに太平洋戦争勃発後には「敵性国民」となった日系人の日本語使用に対してさらに厳しい規制が加えられることとなり、俳句を自由に作ることはできなくなってしまう。そして戦争の終結とともに、これまでの鬱憤を取り戻すかのように俳句ブームが生じたのである。

一九四七年二月に「パウリスタ新聞」が念腹を選者として俳壇が設けると、以後「サンパウロ新聞」（水谷ト城選）「南米時事新聞」（吉川耕花選）「ブラジル時報」（中熊番茶選）「日伯毎日新聞」（渡辺南仙子選）など、戦争中発刊が停止されていた新聞の再刊とともに各紙に俳壇が設けられていった。そして一九四八年には念腹が俳句誌『木陰』を主宰、創刊する。念腹は虚子門の俳人で、俳句を広める目的でブラジル移住を決意した人物である。「ブラジル移民の俳諧にもっとも強い影響力を持った人物であり、ブラジルでホトトギス派の俳句が勢力を持ったのは念腹の力であったといつてよい」とも評された。⁸⁾戦後創刊された俳句誌としては他に、『木陰』

に「対抗している唯一の俳誌」ともいわれた『青空』（一九四九創刊、渡辺南仙子編集）などもあった。句会や俳句人口も増加し、一九五〇年代には『木陰』だけでも「約八〇〇名の俳人読者」を抱えていた。⁹⁾そしてこの一九五〇年代ごろがブラジル日系社会における俳句ブームの頂点であったとされている。¹⁰⁾

このように、ブラジル日系社会において俳句は当初新聞や文芸誌以外の雑誌あるいは句会とつながるかたちで制作・享受され、それが新たな俳人の育成や俳人同士の結びつきを呼びこむことで、さらに新たな句会や俳句誌がつくられていったのである。

ところで、戦後のブラジルで俳句ブームが生じたのにはいくつかの要因が考えられる。そのひとつは、日本語使用の解禁にもなつて自らのエスニック・アイデンティティの依代を日本語による表現行為に求めた人々が、取り組みやすい表現形式としての俳句の特性に着目したということ。そしてもうひとつは、俳句をはじめ短詩型文学は作り手を組織化する方法論が確立していたことである。

また伝統的な短詩型文学も高い水準に達し、日本の歌壇や俳壇に新風を吹き込んでいるようである。ところが散文学の方はさしたる展開を見せず低迷を続けているのはどのような訳であろうか。

次のような「申し訳」がある。短詩型文学は強固な同

人組織と発表機関があり、切磋琢磨の場があるに反し、散文学にはそれがなかったというのである。^①

たとえば、前述の俳人木村圭石がチエテへ移住した際その移住地に句会が組織されたように、俳句の場合特定の俳人や特定の流派を中心として句会や団体が組織され、あるいは新聞雑誌の俳句欄が創設される。このように、俳句ブームは日本語への欲望と組織化の方法論が確立していた俳句とが会うことで生じたと考えられる。

ところで、この俳句ブームのなかで作られていた俳句にはいわゆる文学雑誌以外の新聞雑誌に掲載された句も多い。なかでも注目すべきは太平洋戦争の終戦直後から発行されていた『光輝』『輝号』など、臣道連盟をはじめとするいわゆる「勝ち組」と俳句とのかわりである。

終戦直後、ブラジルの日系社会に大きな混乱が生じたことはよく知られている。すなわち日本が戦争に勝利したと信じる「勝ち組」と、日本が負けたとする「認識派（負け組）」との対立である。「勝ち組」による「認識派」への攻撃は激しく、ときに暗殺さえ行われた。当時の日系人の約八割（あるいは九割）が「勝ち組」の側にいたともいわれるが、この混乱に乗じて皇族の名を騙った詐欺事件に巻き込まれたり、日本から軍艦が迎えに来るというデマを信じて土地を売り払ったりする者さえいたという。^②

俳句ブームはこうした社会状況の下に生じたのである。な

らば、そのような状況のなかで読み・詠まれていた俳句とはいかなるものであったのか。あるいは、そのような特殊な状況において俳句にかかわることについてはどのように認識されていたのだろうか。次節では、今までほとんど言及されることがなかったこうした点について「勝ち組」の雑誌『光輝』『輝号』を中心に考察する。

三 「勝ち組」の俳句史——『光輝』『輝号』の俳句

『光輝』は一九四七年創刊の臣道連盟の機関誌である。創刊号の奥付を見ると「発行所 月刊総合雑誌『光輝社』とある。『総合雑誌』の名の通り、『光輝』には時事評論のほか小説、短歌、詩、俳句などの文芸作品も掲載されていた。創刊号には秋海棠（一六句）、呆人（二〇句）、愚省（三句）の三名の計二九の俳句が掲載されている。

白南風や金魚の鉢の藻の緑^マ 秋海棠

摩天楼一つ見つけし昼の星 同

大曲るチエテの河や鳶高し 同

丘の家ぐつと枝張るパラナ松 聖市 呆人

枯野焼く駅に降りけり水をのむ 同

靴みがき箱をかゝへて日向ぼこ 愚省

基本的には有季定型で作っているようであり、内容はホトトギス系の花鳥諷詠らしい作風である。さらに「白南風」（梅雨の時期に吹く南風）といった季語を使用するなどある

程度の俳句の知識もあることがうかがわれ、ある程度の知識のもとにブラジルの景色を句にしているようである。しかしながら、「摩天楼」の句のようにおそらく意図的でない無季の句があったり、「枯野」「日向ぼこ」（冬の季語）を用いた句と「白南風」（夏の季語）を用いた句とが同時に掲載されたりしている点などに、俳句表現や俳句欄としての未熟さが見られる。

なお作者について述べると、呆人（重清呆人・たもつ）はサンパウロ在住の人物で、創刊号には俳句のほかに短歌、詩「自然は病む」、評論「詩人の動向及び其の批判」、南呂の「獄中吟」の挿絵、附録の「神武天皇御尊影」、さらには表紙画の作者としても名が挙がっており、『光輝』の創刊にかかわりの深い人物であったと推測される。なお秋海棠（古賀秋海棠）や愚省については不明な点が多いが、あるいは『光輝』編集部に近い人物であったかもしれない。

また、一九四八年三月の編集後記に「文芸欄も愛読者の投稿をもつと望み度い」とあるように、「文芸欄」の一部である俳句欄も読者投稿欄としてもつと盛んになることを理想としていたのだろう。しかしながら、号を重ねるにつれて新たな作者の名前も見られるものの、掲載回数や掲載句数から考えると『光輝』の俳句欄の中心にいたのは秋海棠や呆人であり、新たな書き手の発掘に苦心していたさまがうかがわれる。次に、『光輝』と同じく「勝ち組」の雑誌である『輝号』

（一九四九年三月創刊）の俳句を見てみよう。

夏

長野勝美^①

釣り落す水面にゆらぐ夏の雲
小雨うち若葉に玉のまろびけり

新年雑詠

マリ、ア 岡崎賢哲^②

移り来て宮居を拜すがもなき
故郷の夢や九段の初もうで
祖母とゐて夜店にねだるお年玉

上井貢南^③

民族の誇りを咲くか棉の花
流れ星敗戦の出す怪ニユース
うちは絵に語る祖国のそこ力

『輝号』では創刊号に「原稿募集」の広告が載り、募集原稿には「俳句」も含まれているものの、実際に俳句の掲載が確認できるのはその数ヶ月後である。

上に掲げたのは『輝号』の俳句のなかでもその最初期に掲載されていたものである。一読、『光輝』と同様にさほど意図的でない無季の句があることや川柳と見まがうような句が交じっていることがわかる。もともと『光輝』や『輝号』にかぎらず、圭石が選者を務めた戦前の日伯新聞の俳句欄でもその初期には「勿論花鳥諷詠の写生句は少く、時には狂句ら

しいものさえ投句されていた¹⁶というから、スタートしたばかりの俳句欄では書き手のリテラシーの低さはやむをえないものなのかもしれない。

このリテラシーについてさらに述べるなら、ブラジルの俳句には、そもそも日本の文学的伝統や気候に基づいて形成されてきた季語をブラジルにおいていかに処理し使用するかという、独自の問題が存在するのを忘れてはならないだろう。たとえば上掲「新年雑詠」のように年末年始を詠んだ句としては、同じ号に掲載された次の句がある。

餅つきを終へて汗ふく年の暮 ツツパン 田口虹霞

これを日本の歳時記の感覚で読むと、「餅つき」で重い杵を上げ下げしたり餅をこねたりしたために汗をかき、寒中、体から湯気が立ちのぼっている様が想起されよう。しかしブラジル（サンパウロ）を基準に考えるならば解釈は一変する。すなわちブラジルでは年末年始の時期は夏であり、したがってこの句は暑い季節にもかかわらず餅つきをしているという、見ているだけでもうだるような光景を詠んだということになるのである。

このように、日系社会の俳句に盛り込まれた言葉は複数の文脈を背負い込んでしまう。たとえば、「餅つき」は日本の季語の「餅つき」として読んでもよいのか、ブラジルの「餅つき」としてのみ読むべきなのか、あるいは別の読み方が可能なのか。換言すれば、ブラジルの詠み手が「餅つき」を

俳句に詠みこんだとき、その「餅つき」はブラジルの「餅つき」として読まれ、可能性を否定なしに孕んでしまうのである。だが、こうした曖昧さを無理に押し通してしまふ俳句の形式的特性にこそ、日系社会で俳句が好まれた理由の一つがあったのではないか。すなわち読み手には、その「餅つき」の句を日本の「餅つき」を想起すると同時にブラジルの「餅つき」をも想起しながら読むことが許されている。目の前の「ブラジル」が、俳句に詠みこむことで、「日本」に直結する。「日系人」にとつて——とりわけ当時多かった一世や二世にとつて——俳句の持つこの二重性こそ心地よいものだったのではないだろうか。

ところで、リテラシーがさほど練達していない俳句作者のなかにあつて長野勝美のように比較的完成度の高い「写生句」を発表する者がいたのもたしかである。このようなばらつきの原因は俳句の作り手側にあると同時に、そのような句を掲載してしまふ選者側にもあるだろう。『輝号』の最初期の俳句欄選者を誰が務めていたのかは不明であるが、やがて同誌は当時の有力俳人の一人である中熊番茶を選者に迎えることを決定する。

創刊以来、初心者作のよき道場として、そのたくまざる素直な句によつて、特異の地歩を運びつゝあつたわが輝号俳壇も、投句諸氏のためみなき努力により、月を追ふて向上して参りました。

このたび、淡白な中に尽きぬ渋味と、情熱躍る清新なる句風をもつて名ある、時報俳壇選者中熊番茶先生を、わが輝号俳壇選者として迎へること、なりました。読者諸氏には、今後一層振つて御投句あらんことを願ひ致します。⁽¹⁷⁾

中熊番茶はブラジル時報の俳句欄で選者を務めた人物である。ブラジル時報の俳句欄についてはかつて「主として旧派の俳人が集っている」⁽¹⁸⁾評されたことがあった。ここである「旧派」が俳句表現史で言われる意味での「旧派」であるか否かはおくとしても、圭石や念腹らホトトギス系の俳人からは距離をおいていたことはたしかだろう。

さて、その番茶を選者に迎えたことは翌号の「編輯後記」でも述べられている。ところが、まさにその同じ号の「社告」において、「本月号編しう締切後」に番茶から選者を断る旨の手紙が届いたことが伝えられた。この経緯について番茶自身は次のように述べている。

過般出聖中の私に輝号社から同社俳壇の選をしてくれとの依頼があつた。輝号は新聞と異ひ雑誌だからと思つて深ひ考へもなく実は名誉ある選者をおがましくも引き受けた次第だつた。

輝号四月特大号の一頁に社告としてそれが発表されて直ぐ、私はマ市（マリリア市）——引用者注——詩魂同人諸兄の御意見の手紙を尊重して、輝号社へは平身低頭し

て選者辞退の断り状を出さねばならぬ様な不始末になつて了つた。⁽¹⁹⁾

ようするに、番茶が所属していた「詩魂」の同人のなかにならぬ団体であり、またいかなる理由で諫めたのかは不明であるが、ときに暗殺さへ行つた当時の「勝ち組」の行動の激しさを考えれば、「勝ち組」としての旗色を鮮明にしていた『輝号』への参加に難色を示す者がいたとしてもおかしくはないだろう。

このように一端は断られた『輝号』であつたが、その後も交渉を続けたらしく、一九五一年七月号では「なほ選者として番茶氏の高弟の方にして戴くやう、番茶氏及び詩魂の了解を得たから、多分実現するものと期待してゐます」⁽²⁰⁾と伝えている。そして翌号の「ブラジルの俳句界では一流の方で、皆様にも馴じみぶかいお名前なのですが、ある事情のため、「覆面土」の匿名で選を下さることにしました」⁽²¹⁾という説明とともに、番茶は選者を降り、代わつて「覆面土」と名乗る選者が登場する。ところが同年の十二月、突然番茶が選者として再登場し、しかも覆面土の正体は番茶だつたというオチまでつく。そしてその後の二ヶ月は句会の記事が掲載されるが、三月に俳句投稿欄が復活すると選者は番茶ではなく石井青泉という俳人になっているのである。以後青泉が選者を担当することが多くなるが、番茶も作品を寄せるなど、

『輝号』と完全に縁を切ったわけではなかったようだ。

こうした紆余曲折を経ながらも、『輝号』は俳句欄としての体制を整えていく。ここからはその番茶選の俳句を、同誌に掲載された選者吟とともに見ていこう。⁽²²⁾

麗かや軍配あがる勝相撲

聖市 草野聖童子

麗かや盲乞食は子に引かれ

聖市 勝又光雪

春の野にふと忘れ物思ひ出し

イタペセリカダセーラ 田畑珍念

昼寝癖つきたる睡り堪へて居り レヂストロ 松本寐覚

空虚

覆面士⁽²³⁾

大胆にあけつ放しの昼寝かな

蠅一つとまりてゆかむ昼寝貌

時代劇を見て

覆面士⁽²⁴⁾

覆面の武士の大刀うらゝかに

麗かに罷り通るよ覆面子^{マツ}

番茶の句や選句の特徴を挙げるなら、ペーソスを含んだ諧謔性ということになるうか。単に事物の写生することに満足するのではなく、「蠅一つとまりてゆかむ昼寝貌」であればユーモアを、「麗かや盲乞食は子に引かれ」であれば哀感を、というようにテーマを明確に押し出してくるあたりにホトトギス系俳人との違いを見出すことができるだろう。

次に清泉選の句を見てみよう。⁽²⁵⁾

流れ星ゆたかに吾が児ふところに マリリア 平間帝雪
日本のラジオ聴きつゝ夜なべの瞳

アダマンチーナ 渡辺たかし

長雨に棉うなだれて摘みにくし リノポリス 安村杜鵑

棉つむや帰国の夢はなほ捨てず 聖市 鈴木景山

病む妻へ良夜の窓を開けはなつ ラツシヨ 橘東洋

清泉選の句もたんなる風景描写にとどまらずに、心情の吐露や自らの境遇を詠んだ句になっている。では『輝号』に掲載された清泉自身の作品はどうだろうか。

鳴咽

石井清泉⁽²⁶⁾

流星の走るわが手に飛報かな

病篤しと星乱れ飛ぶ街駈けぬ

流星のあまり身近き鳴咽かな

星とぶやいづれもはてしなきものを

わが星の過去美しく流れけり

こうした清泉の作品を見る限り、やはり清泉自身も入選句と同様に単なる写生句とは言い難い作品を発表していることがわかる。このような作風がどのように出来上がったのかについては不明な点が多いが、同時代の日本の俳句表現に詳しくかっと思われる清泉であつてみれば、たとえばここに、大正から昭和期にかけての日本で生まれた新しい俳句表現からの影響を想起してもいいかもしれない。⁽²⁷⁾

いずれにせよ、『輝号』の俳句の水準は番茶選や青泉選の導入以降川柳と見まがうような作品が減少するなど、少なからず向上している。その要因としては、番茶や青泉が『輝号』に関わることを知った既成の俳句作者たちが新たに『輝号』に作品を投稿するようになったということも考えられる。だがそれよりも注目すべきは、青泉選以降の俳句欄に、投稿者のリテラシーを育成するような仕組みがあったことである。

番茶・青泉選以前の俳句欄と以後のそれとを比較したとき、その最も大きな違いは、前者の俳句が作者間で方法論上の齟齬をきたしていたのに対し、後者の場合は統一感がみられるということにある。より具体的にいうなら、番茶・青泉選以降ほとんどの俳句が有季定型を守っているのである。

番茶や青泉は選をするにあたって、それまでのように漠然と俳句を募集するのではなく「棉摘み」や「良夜」といった題（季題）を出して句を募集するいわゆる「題詠」の形をとっていた。これは俳句欄としてはごく当たり前の制度の導入にすぎないが、これにより『輝号』の俳句欄においてそれまで曖昧だった俳句の方法論が有季定型（定型は以前から浸透していた）へと定まった。そしてもうひとつ重要なのは、番茶や青泉の選ではその季題（季語）の生かしが暗に定められていたことである。

棉つむや帰国の夢はなほ捨てず

聖市 鈴木景山

たとえばこの句を番茶・青泉選以前の『輝号』に掲載された次の句と比較してみよう。

故郷の夢や九段の初もうで

岡崎賢哲

賢哲の句は「九段」で「初もうで」をしたという「故郷の夢」をみた、という内容である。一方景山の句は「帰国の夢」を今なお「捨てず」に「棉」を摘んでいる、という内容である。両句とも句の後半が前半部分（「故郷の夢」「棉つむ」）を説明しており、句の構成はよく似ている。しかしながら、後者の季語「初もうで」が日本におけるそれを指しているのに対し、前者の季語「棉つむ」はブラジルにいる現在のそれを指している。ようするに、青泉選では現在を詠む句を採るのである。程度の差はあれ写生を句作の基本に置いているらしい番茶や青泉からすれば、現在の事物を詠むことはいわば当然であつたろう。しかしながら「ブラジル」と「日本」の狭間を生きる者にとつて、賢哲のように「日本」側に重心を据えて句を作るか、それとも景山のように「ブラジル」側に重心を据えるか、という問題は、一見些細なようでいて実はアイデンティティの変革にすら関わる重大事であつたろう。

だが青泉はそうした、いわば後ろ向き季語使用を好まなかったようだ。

夜なべする妻に故郷の便り読む リノポリス 高橋青沼²⁸
 青泉選の一句である。「故郷」の中にはなく、「故郷」の

外にいて便りを読む自分——「日本」ではなく「ブラジル」のなかに自らを見出し「ブラジル」を詠む自分——がここにはある。

そしてこうした作品の傾向が、選者による入選句評や青泉自身の句の掲載（そして無論入選句）によって作者や読者に浸透していくなかで、『輝号』の俳句欄は一定の方向性のもと投稿者が切磋琢磨する場へと変化していくのである。

もともと、景山や青沼の句のような作品は、『輝号』にはこうした句が青泉選以前から少なからずあった。さらにいえばそのような句はすでに「光輝」にもあった。しかし選者としての番茶や青泉が「題詠」を取り入れることであらためて俳句を有季定型と定義しなおかつ作品の方向性を定めたことは、『輝号』やその後の『旭号』において拡大する作者層に対し、そのリテラシーの向上に影響を与えた可能性は十分に考えられよう。

四 最後に——無理を押し通す価値について

ここまで戦後俳句ブームのなかで作られた俳句について「勝ち組」の雑誌をもとに眺めてきた。ところで、二世が中心であったといわれる臣道連盟にあつて、その機関誌に俳句が当然のごとく並んでいるのは、そもそものかなり異様なことなのではないか。というのも、当時の二世は必ずしも俳句を読める・詠めるほどのリテラシーを身につけていた者ばかり

ではなかったからである。

三年前の八月十五日、祖国聖戦の目的完遂の喜びの日を迎へ、我等全伯三十万同胞は感謝感激を味ひまして、胸中に澎湃と盛り上つた民族的自覚は再び邦語教育に重大関心を払ふ様になつたのであります。

然して己が子弟を見ましたとき、戦時中の環境は教育の放任であつた為二十歳にもなる青年が自分の名前すら書けない実例がある位に、一般子弟の日本語学力は実に嘆かほしい程低下してゐたのであります。²⁹

ブラジルにおいてヴァルガス大統領のもと日本語使用に対して厳しい規制が加えられていたことについてはすでに述べた。このような社会状況のなかで、「自分の名前すら書けない」とまではいかないまでも、ブラジルに生まれ育つた二世の日本語能力が一世のそれに劣るものであつたのはいわば当然であつたろう（実際、『輝号』にも「一読者から、雑誌に仮名をつけて貰いたいとの希望があつた」³⁰のである）。そのうえ俳句を読み・詠むリテラシー（俳句リテラシー）となると、その習得は一層困難なものとなる。一九四六年に結成された俳句結社「仙人掌吟社」のメンバーで、俳句に関わる以前から日系社会の川柳作家として知られていた後藤綺朗でさえ「俳句に関してはやはり初心者であり、出された題の言葉の意味すらわからないこともあつた」という。³¹つまり俳句を読み・詠むためには特殊なりテラシーが必要となってくるの

である。

俳句リテラシーとして考えられるのは「季語」や「切字」(あるいは「切れ」)の機能を理解し、文法や歴史的仮名遣いを理解し、五・七・五を中心とする音数律を理解し、そしてそれらを使いこなす能力などであろう。日本語もままならない者にとってこうした俳句リテラシーの獲得が難しいことは言うまでもない。また、日本以外の地で俳句を作ることでは別の困難も生じる。にもかかわらず、俳句がブラジルの日系社会で好まれたのはなぜだろうか。戦前・戦後をブラジル日系社会で過ごした半田知雄は、次のようにいう。

われわれ移民は戦前まで「在留民」或は「在伯移民」であつて、国籍の上ではもちろんのこと、気持の上でも、あくまで日本国民であつた。(略)

ところが、敗戦の「宣伝」は、移民の日本の立場を、つぎつぎと切り崩すものであつた。(略)

いづれにせよ、戦前の日本移民は「在留民」あるいは「在伯同胞」以外のものではなく敗戦を契機として、ただの個人としてブラジル人の社会へ投げ出されたのである。私は、こともなげに、投げ出されたと言つたが、これは今まで自分たちが尊奉してきた精神の支柱をことごとく否定され、逆に、否定してきたものを、シャニムニ肯定しなければならぬ立場に追いやられることであつた。⁽²⁾

「勝ち組」にせよ「認識派」にせよ、敗戦のニュースによつて日系社会にあった人々は「在留民」でも「在伯同胞」でもなく、あるいは「日本人」でも「ブラジル人」でもないというような、宙づり状態に置かれた自らの姿と直面することとなつたのである。そして、彼らが俳句に携わることを志向したのはまさにそんな時であつた。

ここで再び「季語」に話を戻すと、「季語」とは日本の気候を想定しているだけでなく歴史的な文脈を負っている語彙でもある故に、気候的にも文化的にも日本と相異なるブラジルで運用するにはある種の無理をしなければならなかつた。さらに普段「コロニア語」(日本語とポルトガル語を混ぜた言語)を用いている者にとつては自らの言語を「日本語」に変換しつつ自らを表現するという無理さえ伴つたはずだ。しかしブラジル日系社会に生きる人々は「ブラジル」と「日本」とを無理に短絡させるこの局面において、その無理を押しとおしてでも俳句を読み・詠んでいたのである。そして彼らをそうした行動へと駆り立てたのは、俳句に携わることそのものが、「今まで自分たちが尊奉してきた精神の支柱をことごとく否定され、逆に、否定してきたものを、シャニムニ肯定しなければならぬ立場に追いやられ」た彼らにとつて、彼らが彼らとして立つための場所を切り開くための行為だつたからではないだろうか。

- (1) 日本力行会創立百周年記念事業実行委員会、記念誌編纂専門委員会『日本力行会百年の航跡』日本力行会、一九九七。
- (2) 日本力行会伯支部ブラジル力行会『ブラジル力行会四十年史』日本力行会伯支部ブラジル力行会、一九六六。
- (3) 注1に同じ。
- (4) 池田重二『サンパウロ市及び近郊邦人発展史』日伯文化出版社、一九五四。
- (5) 注4に同じ。
- (6) 前山隆『『地平線』の時代—ブラジル日系コロニア文学誌の一断章—』『コロニア文学』一九六六・五。
- (7) 中村茂生によれば、「一九五〇年ごろになると、俳句会の数は六七、俳句人口は六〇〇人ほどになった」という。(中村茂生『ブラジル日系社会の俳句史に関するノート—サンパウロ州バストスの事例から—』『俳句文学館紀要』二〇〇六)
- (8) 注4に同じ。
- (9) 注4に同じ。
- (10) 長谷川清水『コロニア俳句の推移』『万象』一九五五・一。
- (11) 鈴木悌一『創刊のことは』『コロニア文学』一九六六・五。
- (12) 前山隆『移民の日本帰還運動』日本放送出版協会、一九八二。
- (13) 『輝号』(一九五〇・二)より抄出。
- (14) 『輝号』(一九五〇・二)より抄出。
- (15) 『輝号』(一九五〇・三)より抄出。
- (16) 注4に同じ。
- (17) 『杜告』『輝号』一九五一・四。
- (18) 注4に同じ。
- (19) 中熊番茶「あとがき」『輝号』一九五一・六。
- (20) 「編輯後記」『輝号』一九五二・七。
- (21) 「俳句投稿について」『輝号』一九五一・八。
- (22) 一、二句目『輝号』(一九五一・一〇)より抄出。三句目『輝号』(一九五一・一一)より抄出。四句目『輝号』(一九五一・一二)より抄出。
- (23) 『輝号』(一九五一・一二)より抄出。
- (24) 『輝号』(一九五一・一〇)より抄出。
- (25) 一、二句目『輝号』(一九五二・三)より抄出。三、四、五句目『輝号』(一九五二・五)より抄出。
- (26) 『輝号』一九五二・三。
- (27) 青泉は『旭号』選者時代に「私の好きな句」として三〇句余りを挙げて見せたことがあった(石井青泉「健闘を祈る」『旭号』一九五四・一〇)。それらの句の作者名を挙げると、飯田蛇笏や前田普羅といった明治大正期からの著名俳人、水原秋桜子、日野草城といった後続の世代、あるいは中村草田男、加藤楸邨ら人間探求派、西東三鬼、秋元不死男、安住敦ら新興俳句の中心人物、さらには細見綾子や野沢節子などとりわけ戦後目覚ましい活躍を見せた俳人まで網羅している。青泉が戦前・戦中・戦後の日本の俳句表現にかなりの程度詳しい人物であったことがうかがえよう。
- (28) 『輝号』一九五二・三。
- (29) 丸山由三(ペローバ区代表)「邦語教育への叫び」『トレスバラス青年連盟主催第二回弁論大会青年雄弁集』一九四八。
- (30) 「閃光」『輝号』一九五一・一。
- (31) 中村茂生、前掲論文。

(32) 半田知雄「省略されたジグザグ」『コロニア文学』一九六六・九。

付記

なお、紙幅の都合上目録データの一部をサンプルとしてここでは掲げ、全体のデータはリテラシー史研究会ホームページ (<http://www.fwaseda.jp/a-wada/literacy/>) に掲載しているので、参照願いたい。

今回考察の対象とした『光輝』『輝号』は、国立国会図書館（憲政資料室）にも所蔵されている。以下に力行会館の所蔵分とあわせて提示する。

資料名	国会図書館所蔵分	力行会館所蔵分
光輝	一九四七・一二／四八・二〇	一九四七・一二／一九四八・七
輝号	一九四九・三／五三・二 ※欠号＝一九四九・四／四九・七	一九四九・一二／一九五〇・四 ／一九五〇・六 一九五一・一／三／一九五二・五

なお、今回の調査および研究にあたっては力行会館職員の皆様に大変お世話になりました。謹んでお礼申し上げます。

(こじま・ゆたか／東京家政学院中高)